経営者のひととき

太宰府天満宮にて
——神社と現代アート

海洋開発推進委員長
大成建設会長
田中（たなか） 茂義（しげよし）

太宰府天満宮に奇抜な神殿が設営されたと聞き、遅ればせながら久々に参拝に出向いた。御本殿の大改修に要する約3年間の期間限定の仮殿（かりどの）であるという。大阪・関西万博の会場デザインプロデューサーを務める建築家の藤本壮介氏が現代建築の発想で太宰府にマッチした仮殿を設計したものである。西高辻信宏宮司のリクエストに応じて設計したとのこと。

仮殿のカーブした薄い屋根の上部には梅、樟、桜などが植えられ、青々とした緑の樹木をいただいている。飛梅（とびうめ）伝説のある緑多き天満宮になじんだ不思議な仮殿である。

太宰府にはこれ以外にも多くの現代アートがある。参道を抜けて鳥居と反対側の右手に進むと浮殿があり、古い木造のお社の中にキラキラと光る直径1メートルほどの球体がある。その中心には磁石があり、たくさんの金属片を吸い寄せて球体を形成している。英国の現代アーティスト ライアン・ガンダーの作品で、タイトルは『本当にキラキラするけれど何の意味もないもの』という。

参道を抜けた鳥居の先の太鼓橋は三つの橋から成っており、それぞれ過去・現在・未来を表しているとの話。この橋を越えた先の楼門をくぐると、前述の仮殿が現れる。この仮殿は前衛的建築として参拝者にインパクトを与えながらも、緑の多い天満宮に調和している。参拝者たちも違和感を覚えている様子はない。実はこのような現代アートはこれら以外にも天満宮のそこかしこに存在している。

仮殿の後方にある御本殿の裏手には松葉づえが突き刺さった大きなコンクリートの岩がある。『信仰について考える』という英国のサイモン・フジワラの作品で、フェイクの岩に突き刺さった松葉づえもまた、遠い将来には信仰の対象になるのでは、というメッセージだという。

御祭神（ごさいじん）である菅原道真公すなわち天神様は、昔から学問の神様であると同時に文化芸術の神様として人々から厚く信仰されてきた。太宰府天満宮や神道自体が、現代においても国内外の多くのアーティストの創作意欲をかきたてるのだろうか。天満宮およびその周辺を散策すると本稿では紹介しきれないほどの現代アートがあるそうで、多くの新しい発見がありそうだ。神社でのお詣りもさることながら、何か得をしたような感覚、ある種のセレンディピティを感じるのである。

皆さんもぜひ、足を運ばれてみてはいかがか。

太宰府天満宮仮殿と筆者